

日本エアテック 社内報 2013年秋号



努力と、楽しんだ量が結果に。

— 検定合格者の声 ② 榎本 尚光 —

榎本さんは技能検定2級合格をされました。
榎本 「治工具仕上検定2級」に、昨年やつと合格できました。
— 昨年から2度目のチャレンジ。

榎本 初挑戦の時は学科はパスできましたが、実技でひっかかってしまったんです。年に1回しかない検定ですから、2年目は実技に集中して練習しました。
— 検定の内容というのはどういった感じですか？

榎本 S45Cという角材をですね、11/100以内の誤差に収めた図形を2個製作します。その2つを組み合わせた時に14/100以内の誤差に収めると、つまり正確性を問われると。

榎本 そうですね。練習量が問われるというか、実際の仕事のような緊張感もありついで、想像していたよりは大変な検定だと感じましたね。
— 話は戻りますが、再挑戦というのは、口で言うのは簡単。でも気持ち的になかなか難しい面もあると思うのですが。

榎本 確かに若干ヘコみましたね。それよりも焦りの気持ちのほうが強くて。「これはイカン」と悔しかったですね。練習が足りていないことを突き付けられたようなものですね。逆にリベンジに燃えた部分もありましたよ。
— 2年目は相当やり込んだ。

榎本 平日に通常の業務をこなしつつ、検定のための練習をするのは大変です。とはいえもちろん平日もやらなきゃいけないんですけど。仕事終わってから20時から練習したりね。加えて土日にも機械を自由に使って良い、と上司に許可をとりつけて。毎週休日は5、6時間くらいは練習したかなあ。
— 1年目と2年目の差は、やはり練習量だと。

榎本 うーん。それもそうですけど。もうひとつ大きかったのは、手を動かすだけじゃなくて、目で見て研究したってことでしょうか。YouTube(ユーチューブ)※インターネット上の動画閲覧サイトで「広島ものづくりマイスター」の動画みたいなのがあってですね。それを見て「ほー、こうやんのか」とか、色々得るものは多かった。職人仕事は「やって」で「見て」で上手くなるものだから。本を読んでもわからなかった工程が、動画のおかげでできるようになりました。
— 練習に加えて研究もした、と。

榎本 ですからね。2回も試験を受けさせられた、これがやらされ仕事になるとダメだなあと。気持ち次第ですよ。こういうのはある意味、楽しんでやらないと。実際、手を動かすと没頭してしまうタチですからね。あまり余計なことを考えずやり込んだ感じはあります。
— 苦行も楽しめば天国ですね。

榎本 いい意味で、遊び感覚でやろうと。モノづくりが好きでやってる仕事の延長線上と考えると、そんなにプレッシャーも感じずに済むと思うんです。もちろん人間ですから、ノウハウは蓄積されます。やっていたら、必ずできる。
— 楽しんでいけば、時間も惜しくない。

榎本 検定の半年前に「今年も出てくれ」と上司に言われて。それから半年間、まあ体はキツイんですが、楽しかったよな気がします。なかなか得難い機会ですし、それに向けて努力する時間を与えられたのは良い経験だったなと。相当打ち込んだし、頭も使いました。いや、本当に頑張った(笑)。
— 笑)しかも合格。大きな成功体験ですね。

榎本 報われるなあと。神様いるんですね(笑)。それにね、練習し続けていると、こう、いきなりプレイクスルーするということも。それを実感できたことが、いざばん嬉しかったことかもしれないね。何度も言いますが、やればできるもんだと思います。一度、不合格だった僕だから余計にそう思うんですよ。



えのもと ひさみつ
榎本 尚光
第一工作部 第一工作課 班長
2012年 治工具仕上検定2級 合格

この打席に立てる、という誉。

— 検定合格者の声 ③ 高橋 尚之 —

— 2008年にフライス盤の技能検定2級に合格された。
高橋 つい先日の技能検定で1級にもチャレンジしました。
— 手応えはどうですか。

高橋 制限時間3時間半で図面通りの形状に加工するという内容で。寸法の難易度を考えると、時間的には結構カツカツの内容です。まずは時間との闘いが大きいですね。やはり普段の実務のコスト意識、時間IIコストという考え方が如実に表れる検定なんだと思いました。
— 普段の力量が試される。

高橋 もちろん。実技検定ですからね。反面、現場では汎用機、NCだとデジタルの位置表示機でプログラミングするのが現場の主流ですが、検定ではデジタルは禁止なんです。ハンドルのアナログ目盛りで加工しなくちゃいけない。体の感覚、目、触れた感触、切れている音なんかで工程や刃物の送り方を決定していく。ここが難しい。
— より職人的な側面が問われる。

高橋 とはいえ、課題の内容、図面自体は検定前に把握しているんで練習は思う存分できるんです。練習しても難しいものは難しいんですけどね。ハンドルから伝わる感覚で、なんて普段の仕事じゃほとんど無いシチュエーション。場数、経験が足りないんです。だからこそ練習をできる限りやり込ませたい。

— 一発勝負の検定をモノにするには、踏んだ場数が重要なんですね。

高橋 時間を考えると段取りも頭を使わなきゃいけません。そこは普段の仕事と似ています。臨機応変さも求められます。またアナログ目盛りのハンドルも、自分の思い通りにはなりません。完璧に調整したと思ってもずれてくる、なんてこともあります。これも臨機応変さが求められます。例えば24に設定しても気付いたら23・98になっている。そこで追いつくか、修正するか、その判断も、実際の仕事ではよくあることです。
— 経験というお話が出ましたが、社内には経験豊富なベテランも多いです。その方々にアドバイスを求めたりは？

高橋 うーん。もちろんベテランさんにも聞くのもいいんですが、まずは自分で考えたいな、というのがあって。それに、僕が受ける検定は過去に受験者の前例が社内にはない。正確には20数年前にいらしたようなんですが…。
— 検定内容も変わっているし、アドバイスも難しい、と。

高橋 そうです。だから自分が初の挑戦者という気持ちで挑みましたね。それに、誰でも受けさせてもらえるものでもないんです。まず練習ひとつするにも、会社側にコストがかかる。刃物とか使いますから。合格する見込みがある人しか選ばれませんよ。ですから、この場を与えてもらえたことにはありがたいこと。期待には応えたいと思えます。やらされてる、ではなくやってやろうと。

高橋 そう思います。僕は5年前の2級合格から次の1級を目指してましたから今回、自ら手を挙げて申し出たんですけど、実際に選んでもらえて、やっぱり嬉しかったですね。
— 期待感や、認められた感じは、やはりある。

高橋 あります。基本的には会社が人を選抜する形ではあるんですが、そこは普段の仕事やその時点で腕を加味した上で判断ですから。そこで選ばれなかったとしても、この年に1回チャンスを、目指す価値は大いにあると思います。
— そこでさらに合格すれば…



たかはし なおゆき
高橋 尚之
第二工作部 工作課 班長
2008年 フライス2級技能士 合格

平成25年度 国家技能検定 実施

KEYMAN'S INTERVIEW



■ 国家技能検定とは ■

働く人達の技能及びこれに関する知識の程度を判定する基準が、各地によりバラバラであれば、労働者の技能育成に支障が出ることから、全国的に基準を統一し、かつ、検定が公正に実施されるように、国家検定として実施されています。

労働者の技能と地位の向上を図ることを目的に職業能力開発促進法に基づき、1959年(昭和34年)度に第1回が実施されました。

この時の職種は、5つでしたが、2013年4月には128職種にも増加しています。当社が国家技能検定実技試験の会場として、初めて実技試験をしたのが2008年でした。

初めは何をどうすれば良いか分からず、職業能力開発協会に出向き指導・協力を頂きながら、また、技能検定を既にお持ちの社員の皆さんと力を合わせて進めてきました。

本年8月11日(日)の実施が、社内の実技試験の6回目になりました。検定委員・補佐員など社内スタッフも入れ替わり、若返りをしています。検定委員は、外部の会社から一人が派遣され公正な検定審査がされるのが原則です。勿論、当社の検定委員も、他の会社へ検定委員として派遣され検定の審査を行います。

社員の皆さんは、技能検定を受験できる事が誇りであり、チャンスだと考えてください。将来は他の人に仕事を教え、技術を伝承していく立場になります。

会社にとりましても、国家技能検定を会場として出来ることは、社会的に貢献できる場だと思えます。技能検定に合格し、技能士と称する社員が増える事も製造業の会社には利益をもたらす要因です。技能検定を社内でも実施できることは、そこに多くの技能者が要るからだと考えます。企業は利益が無くては何もできません、今後も若い人たちが技能検定試験を受けたい・頑張りたいと元気に言える職場を作りましょう。

個人の技能が上がり、会社のもの作りのスキルも上がるようにこれからも一緒に頑張ります。

第二工作部 部長 東野道男

現在地を再確認する機会。 - 検定合格者の声 ① 遠藤 芳邦 -

遠藤さんは2年前に技能検定1級に合格されて。遠藤 そうです。その前に2級に合格して、今から4年前ですね。

遠藤 2級をとらないと1級に進めないというルールもあってですね。

遠藤 マシニングセンターに関する検定ですね。マシニングの検定は他と少し試験内容が違います。単純に制限時間内に製造する実技だけではなく、仕上がったモノのエラーチェック、間違い探しですね。工程の間違いを発見する問題なども加わってきます。現場実務では生産技術の要素も含まれる仕事ですから、試験項目も極めて実務に近い内容と言えます。

遠藤 エンジンとか？といった面を考えるのも必要と。

遠藤 プログラムから疑う目、これは現場実務でも大切な能力ですね。

遠藤 現場で養った力が総合的に試されるという感じ。となると普段、仕事を頑張っている人は…

遠藤 強いですね。やはり普段の力、現場力みたいなものが大きいんです。加えて学科試験もありますから。

遠藤 どちらもなかなか難関。やはり結構勉強はされましたか？

遠藤 しました。本を買ったりして。特にペーパーのほうは広く知識があるので。

遠藤 お仕事と並行しながら試験勉強というのは…

遠藤 うん。大変です(笑)。でもまあ、ある意味自分を見つめ直す良い機会かなと。

遠藤 自分を見つめ直す。

遠藤 ええと、何というか、製造の仕事というのはある意味で我流なところがあると思うんですね。先輩から仕事を引き継いで、そこから先は日々改善ですから自分のやり方でやっていくことになります。

遠藤 ああ、まさに自己流の現場仕様がスタンダードになると。

遠藤 つまりとても狭い視野で仕事をしていくことになりかねないですね。そこで、こういう公の機関での試験を受ける、それに向けて勉強することで視野が広がるという側面はあったと思います。

遠藤 実際どうでしたか？

遠藤 発見は多かったですね。「ほう、一般的にはこういうやり方か」とか「俺、今まで手間なことしてたな」とか顧みるところも結構あって。あくまでもモノづくりは現場で行われますから、現場に沿ったやり方で良いんですが、それだと次に「教える」立場になった時に困ることもある。

遠藤 ひとつの教え方がダメでも、知識とか、一般論も交えながら、かつ検定に合格した自信を持って伝えていくことはできるかなと。

遠藤 合格したという自信は、やっぱりつきますか？

遠藤 ある意味よそでも通用する力がありますよ、というお墨付きみたいなものだと思うんです。あとは新規の仕事が来た時も恐れずに済むというか。

遠藤 今、新規のお仕事は多いと思います。

遠藤 そうですね。新しい仕事というのは、得てしてややこしい。難しい。難解。そういうものです。新しいことを始めるわけですから。職人としては「これ、できるか？」という恐れ気持ちは芽生えるものです。

遠藤 ところで自信が活きる。

遠藤 そう。まあ気持ちの部分が大いかもしれません。でも仕事って気持ちひとつで変わるでしょう？前向きな姿勢で挑戦できたら、それは必ず良い仕事になる。ですからね、若手とか中堅の人達もどんどんチャレンジしてほしいですね。自分のために。

遠藤 自分から手を挙げるくらいの勢いで。

遠藤 世の中のスタンダードを知って、自分の実力を知る機会。合格できたら大したものだ！と思って良いと思うんです。日々の仕事を確実にこなすのも大切ですけどね。でも自分の今までがどうだったのか、やってきたことがどんなものなのか。それが良い結果になれば、毎日のやる気も変わってくると思います。

遠藤 ダメだったとしても…

遠藤 また頑張れるでしょう。「ちくしょう！」と。それでこそ職人。それはそれで毎日張りが出ますよね。目標があると。

遠藤 仕事も楽しくなる。

遠藤 仕事というのは、技術がある人のところに集まってくるものです。検定合格者が集まる会社、技術力の強い職人が集まる会社には、それこそ、難しく、面白い依頼が絶えな

りして、そういう状態になるのを想像すると、今から楽しみです。



えんどう よしくに
遠藤 芳邦
第一工作部 第一工作課 課長
2009年 機械加工技能士2級 合格
2011年 機械加工技能士1級 合格